

# 2022年度『経営者のための10冊』

## 読書の秋 本質を見極めるための書籍

物事の本質を見極めることは生易しいことではない。

井筒俊彦氏の「ロシア的人間」は、次の冒頭文から始まる。「全世界の目が向けられている。全世界が耳をそばだてている。ロシアは一体何をやり出すだろう。一体何を言い出すのだろう、と。その一挙手一投足が、その一言半句が、たちまち世界の隅々にまで波動して行って、至る処で痙攣をおこす。今やロシアは世界史の真只中に怪物のような姿をのっけりと現してきた」と。

そして、ピョートル大帝とレーニンにとっては、歴史的必然性の大善を驀進するためには目的実現のために手段を選ぶ必要はなかったとまで言い切る。半世紀以上も前の論考であるが、まさにその輝きは失われてい

ない。

このような本質を見極める力は、仇やおろそかなに

である。今回で6年目となるが、経営者がこれから迎える人生の黄金時代を心豊



バイザー  
JSCCホールディングス会長  
**石黒 和義**  
Ishiguro Kazuyoshi

いしぐる・かずよし

1944年愛知県出身。67年名古屋大学工学部卒業。70年同大学法学部卒業後、日本アイ・ビー・エム入社。95年取締役中部システム事業部長、99年常務取締役西日本支社長、2001年日本ビジネスコンピューター(現JBCCホールディングス)社長、10年会長、12年最高顧問。16年生涯現役株式会社社長、17年会長。同年イグアス・エグゼクティブアドバイザー。21年佛教大学大学院文学研究科修士課程修了。22年同後期博士課程在学中。著書に「相撲錦絵発見記」(中日新聞社)、「和らぐ好奇心」(日経BP企画)、「生きる」(財界研究所)など。

身につくものではないが、せめて旺盛な好奇心と問題意識だけは持ち続けたいもの

かに過ごすために、役立つような10冊を紹介することにした。

### 『孤独という道づれ』

岸恵子 著 幻冬舎文庫

「孤独という道づれは、ありがたいような、面倒くさくて、小難しく、疲れて、やりきれないような…」と続く。わかるような気もするが、この表現には含みがありそうだ。「孤独は宝物」と言えるうちは気持ちに張りがあり、あくまで高見に登ろうとする意欲が感じられ、スターの健在ぶりに遅しささえ覚える。もちろん、言葉遣いも美しく読後感は悪くない。



### 『イタリア紀行』(上・中・下)

ゲーテ 著 相良守峰 訳  
岩波文庫

ゆったりとイタリアを巡るゲーテの旅行記は、どこから読んでも面白い。イタリア旅行には必携の書であるが、今は寓居で仕方なくシチリアに行ったつもりで読み返している。ゲーテがこの旅に出たのは37歳、イタリア紀行をまとめたのが65歳。四半世紀も過ぎて書き改めるとは、余程楽しい旅であったに違いない。



『ロシア的人間—新版』

井筒俊彦 著 中公文庫

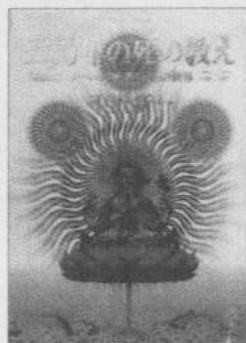
プーシキンから始まり、トルストイ、ドストエフスキーを経てチェホフまで、19世紀ロシア文学の流れの中に、ロシア的理念の本質を探ろうとする。ロシアは面貌を変えたが「ロシア人の魂の奥底にひそむ根源的人間性だけは、そうたやすく変わらないだろう」と、西ヨーロッパ的ヒューマンイズムとの違いを指摘する。半世紀も前に、この本質を見抜いていたとは。



『三万年の死の教え チベット「死者の書」の世界』

中沢新一 著 角川書店

千年のスパンで考えるには相応しい稀覯本。「誕生の時には、あなたが泣き、全世界が喜びに沸く。死ぬときには、全世界が泣き、あなたには喜びがあふれる」。ラマ僧の言葉である。仏教を超えてボン教まで包み込むスケールの大きさ、それを象徴して「三万年」という言葉を使った。その巧みに誘われて、ラサに向かったのは20年も前のこと。



『笑いとお癒力』

ノーマン・カズンズ 著 松田銃 訳 岩波現代文庫

笑いの効能についての古典本。難病の膠原病に襲われ、患者と主治医の信頼関係のもとに型破りな積極療法を試み、死の瀬戸際から生還する。その一つが笑い療法で、「面白い小ばなしを聞くと、数時間後の血沈測定はいつも5ポイント低くなった」と。作り笑いでも免疫活性化に効果があるようで、先ずは笑うにこしたことはない。



『わたしと日本の七十年—オランダ人銀行家の回想記』

ハンス・プリックマン 著 溝口広美 訳 西田書店

昭和25年(1950)、戦後間もない時期に18歳で来日。オランダの国際銀行のバンカーとして、24年間にわたり日本経済の現場で活躍。日蘭協会で文化交流につとめ、日本人について「思いやりと非暴力により調和を保つ日本的生き方」と喝破する。私たちはこれに相応しいあり様を維持し続けているのであろうか。



『ザ・フォックス』

フレデリック・フォーサイス 著 黒原敏行 訳 角川文庫

フォーサイスは健在のようで、『ジャッカルの日』から始まって十分に堪能させていただいた。今回は、ハッカーの天才少年を武器として、老スパイがならず者国家に仕掛けるサイバー戦で、ロシア、イラン、北朝鮮とその展開は目まぐるしい。ウクライナ侵攻を匂わせ、北朝鮮の「チャウシェスクのとき」が予言とは思えなくなる。



『味覚法楽』

魚谷常吉 著 中公文庫ワイド版

「まず話の皮切りというわけで、皮の話からはじめよう」と、洒落た話から始まる。魚谷常吉は、自ら包丁をにぎる料亭の料理人であり、茶人であり、食通でもあり、味覚の追究は多面的である。珍しい美味しいものを食べるには、料理人の友達になること、お題目を唱えず適度にほめる程度にすること、美味しいからといって、能書きを言わないこと。喋りすぎは不味いと言ったことであろう。



『嫌われた監督 落合博満は中日をどう変えたのか』

鈴木忠平 著 文藝春秋

2007年の日本シリーズ第5戦、完全試合目前に山井投手からストッパー岩瀬に代えた。中日は日本一に輝き、勝つてみづらなと言われた落合監督の真骨頂。退任発表を突き付けられた2011年、驚異的な逆転劇でリーグ連覇。球場では落合コールが巻き起こるが、その姿は無かった。ドラキチならずとも、読んでみたくなる。



『キム』

ラドヤード・キプリング 著 木村正則 訳 光文社古典新訳文庫

中央アジアの覇権を争うグレート・ゲーム。その最中に「聖なる川」を求めて、少年キムとチベット僧の行脚がはじまる。混沌としたインドに大国の諜報戦が加わり、混迷さは増して来る。そこでの救いは老僧の佇まいにあった。「老僧は膝の上で印を結び、口元をほころばせた。己はもとより、己が愛する者のために救済を勝ち得たということだろうか」と。

